

一般教室での視聴覚教材を使ったドイツ語授業の可能性

西村千恵子

近年、コミュニケーションを中心にした外国語修得が目指されるなか、そのために使用されるソフトウェアとしての視聴覚教材は、コンピュータ関連機器の急速な機能向上と相まって大幅に進歩しているので、それらを利用した外国語教育が盛んになり、視聴覚教室も充実しつつある。この現状に合わせて、それらの有効な使用方法に関する研究も外国語教育の中で重視されるであろう。

外国語教育を行う場合、LL教室、AV教室、又最近ではCALL教室を毎時間使用するのとはごく当たり前のことになりつつある。また、それらの活用が学生に与える刺激や、モチベーションの想起に大いに役に立つことは、これまでも多くの指摘がなされている。したがって、それぞれの設備が整った教室は、視聴覚教材を効果的に活用出来るプログラムを組んだ上で使用されるべきである。

それらをまとめた研究も期待される分野だと思われるが、ここではむしろ授業における視聴覚機器の充実の必要性と併せ、第2外国語としてごく短時間に、ドイツ語に接することになる学生たちへの対応について簡単にレポートしていきたい。

一般に学生たちは大学に入学した時点で、少なくとも6年間は英語に接している。しかし、第2外国語として学習を始める言語は、彼らの多くにとって初めての体験である。その上、学習時間にも限り(90分×25回前後)がある。このような制限の中での視聴覚教材

使用には、第1外国語の英語とは異なる視点が必要になる。つまり、どこに重点を置くのが望ましいかである。

英語を6年間習得してきた後で、たとえば、ドイツ語の音を構築することは、日本人の口蓋の構造や心理からすると大変難しい。視聴覚教材の利用で実際のドイツ語の音を聞き、視覚的・聴覚的な刺激を伴いながら音を認識していく方法は、音をつくり出す手助けをするには効果的であると思われる。問題は、全授業時間のどれだけを、どの時点で、それに費やすかである。ネイティブスピーカー並みに発音できるに越したことはないが、それにこだわり過ぎるともっと大切なものが留守になる。

また外国語の学習は、言語そのものの知識に加え、初めて接する外国語が使われている国はどのような国なのか、どんな文化があり、どのような人が暮らしているのかを理解することが重要であることは言うまでもない。それらを最も手っ取り早く想起させてくれる教材としてビデオやDVDの活用はますます欠かせなくなる。それらを教室の中でどのように使うか工夫を要求されるところが、あるクラスで通年をCALL教室で、と突然あてがわれたとき、半期で教室変更をお願いせざるを得なかった。それは、こちら側の計画の不十分さ、すなわち、教科書選択そのものがCALL教室向きではなかったこともあったのだが、学生に発表させ、グループ練習の中に入っただけの指導となると、折角の機器を

全く使わない日ができてしまった。

それに、いまひとつは教室の設備の形態に関する問題である。学生一人一人にコンピュータのモニターが与えられている教室は、少ない人数でも教室に拡がり過ぎ、初修ドイツ語には不向きである。備えられた機能を十分に使用する以前に、学生がコンピュータで授業以外のことをしはじめ、コミュニケーションを中心とする授業では大きな障害となった。

それゆえ、授業によってはAV教室やLL教室を使用するより、一般の教室の方が使い勝手がいい場合もあると考えられる。ただ、その教室には、最低CD・ビデオ・DVDなどの再生装置があることが望ましい。ここ1～2年、一般教室に備わった機器を使って授業をしてきたが、全く不便を感じていない。DVD再生装置が備わっていない教室でどうしてもDVDが必要になったとき、「プレイステーションがあれば視ることができる」という提案を学生がしてくれ、実際にその学生が持参した機器を利用して視たということもあった。このアイデアには感嘆したが、この場合は、テレビ本体に接続する入力端子が手の届くところにあったからこそ可能であった。

教室の中で文法の説明をし、教科書の読み解きだけをするだけではなく、実際に学生が参加する授業では、その中で学生をコントロールするだけで時間は瞬く間に過ぎていく。その中で、10分程の間、Landeskundeとしてビデオを見せたり、授業と同じ程度の内容の部分映画などから拾い出して見せたりすることを計画するが、授業の進捗度を優先させると、教材として用意していたDVDやビデオを見せる時間がなくなることがある。だが音響教材としてのCDに関しては最近ほとんどの教科書に添付されているので、宿題等の自習用として必ず授業のプログラムに組み込

んでいる。

また、ドイツ語圏で制作された映画などは、意外にレンタルショップで手に入る作品があるのだが、紹介する場合、ボードにタイトルを書き、内容を口頭で話すだけでは学生が手に取るところまではなかなか行かない。しかし、紹介のつもりで部分的に見せると反応は大きく違う。そういったショートカットの場合、DVDはシーンごとのまとめがあり、数章まとめて見られるので非常に便利である。大抵の場合、授業の後で一人二人は正確なタイトルを尋ね、自分で見てみようとする学生がいる。90分の授業の中で、ある映画を一本まるごと見ることは不可能だが、ある程度の内容を伝えることができる場合には、年に一度くらい時間をとって見せることもある。この場合、習ったいくつかの単語や表現が聞き取れることもある程度期待はするが、全てのドイツ語を聞き取るというより、画面に現れる日本と違った習慣などと同時に、生きている人間が自分たちと同じであることをあらためて認識してもらおう機会として利用している。学生たちには必ず感想等を求めるのだが、概して真面目に取り組み、見終わった後の感想もしっかり書いている。映画を使った授業に関しては、アンケート調査などの資料と併せ、別の機会に詳しく述べたい。

限られた期間内に限られた時間を使って新しい言語を習得させるということは、視聴覚教材の飛躍的な進歩に頼ったとしても本質的に難しい。あとは学生たちがその言語や、それが使われている国にどれだけ興味をもつか、あるいはその言語の習得が必要になったとき、拒絶反応を示さずに取り組めるかどうかなど、それぞれの自発的な学習に負うところが大きい。そのきっかけが学校での授業であると理解している。

「百聞は一見にしかず」ということわざがあるが、最近の視聴覚教材は、その「一见」をある程度補完してくれるまでに進歩してきている。しかしながら、いかに優秀な道具でも、それを使いこなすだけのスキルは必要であるし、優秀とはいえ学生の能力や関心を無視したような視聴覚教材ばかりでは、第2外国語の授業用教材には不適當である。

それとともに、授業がどのような目的で行

われるかが前提にあるのだが、学生の授業参加を重視するコミュニケーションクラスでは、全ての機器が揃った大掛かりな教室よりも、一般の教室に最低限の視聴覚機器がコンパクトに揃い、椅子や机が自由に動かせる環境が望ましいということである。それぞれの目的に応じた視聴覚教材や機器の充実を期待したい。